

「タマネギの里」を 築いた人びと

かつて全国でも有数のタマネギ産地として名をはせた東区。
そのまた昔は広い森林地帯でした。
森が豊かな畑に変わり、都市化が進んで、
現在のような姿になるまでには、
先人の絶え間ない努力がありました。
今月はタマネギ栽培を通じて歴史を振り返り、
まちの発展の様子をたどってみましょう。

1959（昭和34）年の丘珠町におけるタマネギ収穫のようす（写真：札幌市写真ライブラリー所蔵）

東区の開拓時代

まちづくりの始まり

東区に初めて本州からの開拓者が入植したのは、一八六六（慶応二）年のことです。江戸幕府は、現在の北八〜一四条東七〜一六丁目辺りに農民を移し、御手作場（模範農場）を造りました。こうしてできた村は「察歩呂村」と名付けられました。

御手作場の指導者となったのは、大友亀太郎という人物です。大友亀太郎は、農民が入ってくる前に「黒鋤」と呼ばれる土木工事の専門集団を連れてきて、開墾を行っています。

北海道の開拓では、木を倒し、根を抜いて焼き払う、といった作業を、全部農民が行わなければなりません。開墾に疲れて、耕地が出来上がらないうちに夜逃げしてしまう農民もたくさんいます。しかし、御手作場は独自の方法を探ったため、移民全員が定住しました。

江戸幕府が倒れて明治時代になると、新政府は開拓使を設置して、札幌本府の建設を始めました。その後、農業や商業を志した人たちが、開拓使が本州で募集した農業移民団が入植してきます。こ



祖大開拓の東区といわれる友亀太郎

れらの人々が、以前から住んでいたアイヌ民族や御手作場の人たちに加わって、東区の基礎的な地域社会を形成したのです。



明治4年、開拓当時の村（苗穂村）

農工業の発展を支えた

札幌村の人たち

最新技術の発信地

開拓使は札幌の産業の振興を図るため、一八七二（明治四年）年、北一〇、一一条東五、六丁目辺りに生産局をつくり、実践農園を開きました。当時の札幌で作られていた農産物のほとんど全部が、ここで試作されてから各地に広まってきました。

このころ、タマネギの種がアメリカからもたらされ、この農園で試作されました。これが、北海道のタマネギ栽培の始めだといわれています。生産局は農業だけでなく、畜産や工業に関する調査研究も行いました。これらの仕事の担い手となったのは、御手作場への入植者を中心とした人たちです。現在の札幌の産業の発展の基礎は、東区の先人たちの力によるところが大きかったです。